



忘れたくない記憶

豊村満州開拓団集団自決

昭和二十年（一九四五）八月十七日、豊村満州開拓団本部で開拓団幹部ら百四十人あまりが爆死した悲劇がありました。かつて原七郷と呼ばれた干ばつ地帯にあって、養蚕と畑作を主な生業とする零細な農村であった豊村（現在の南アルプス市上今井、沢登、十五所、吉田）が、新天地を求め国の政策によって、旧満州国（現在の中国東北部）の四道河（しどうが、スードーホー）と呼ばれる場所に、分村入植した歴史があります。

昭和十五年（一九四〇）二月に先遣隊が発し、昭和十七年（一九四二）四月に本隊が入植、記録によれば、その規模は、開戦時五十五戸、百六十五人だったと伝えられています。その後も入植は続き、終戦時には、より多くの人が豊村開拓団に暮らしていたことでしょう。

事件は、終戦直後に起こりました。昭和二十年には戦局は悪化の一途をたどり、八月十五日、ついに日本は無条件降伏をすることになります。このころには、旧ソ連も満州に侵攻してきており、開拓団にも終戦の報が届いていましたが、他との通信連絡は途絶し、周辺の治安は極度に悪化していたといわれます。



満州開拓殉難者慰霊碑 諏訪神社（吉田）



諏訪神社（吉田）



慰霊碑の背面には、犠牲者の名が刻まれる。

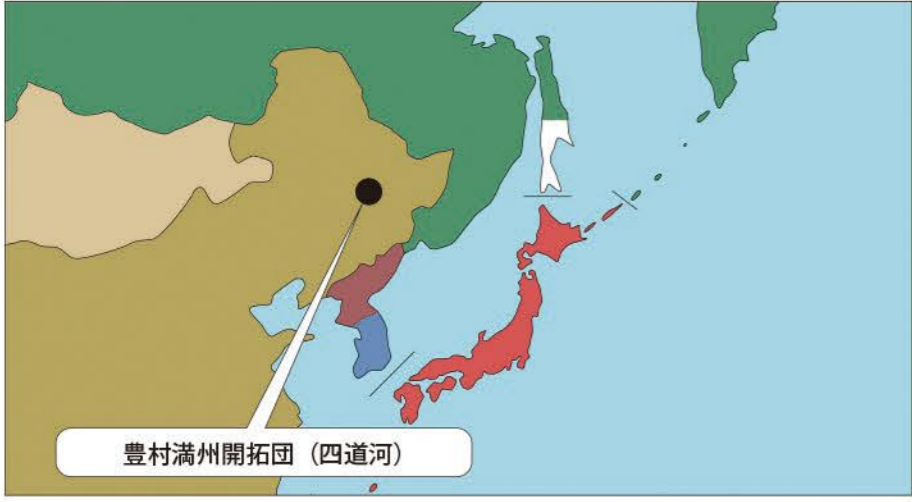
このような中、開拓団は度重なる「土匪」の襲来を受けたといわれ、応戦しましたが、戦死者もでていました。弾薬が尽き、負傷者も増え、戦力も著しく低下し、これ以上の交戦は無謀であるし、重軽傷者を同道しての脱出は不可能であるとして、追い詰められ孤立した人々は、自決することに決めたのです。八月十七日、村人の大部分にあたる百四十名あまりが、本部建物に集合して防戦用に支給されていたダイナマイトに火をつけ爆死したと伝えられています。その中には、一歳に満たない乳児から、七十歳を超える老人までいたそうです。

集団自決の報は、大やけどを負いながら生き延びた方が、同胞のいる収容所にたどり着き、悲劇を伝えて息絶えたことにより、今日に伝えられることになりました。また、自決からのただひとりの生存者であった女兒は、中国人の養父母に引き取られ、いわゆる中国残留日本人孤児となって、戦後長く故郷の土を踏むことができませんでした。

昭和三十三年（一九五七）には、この事件の慰霊碑が吉田の諏訪神社境内に建立され、その悲劇を今に伝えていきます。そして現在も、事件のあった八月十七日には、毎年ここで慰霊祭が行われています。

アジア太平洋戦争では、戦場で亡くなった方以外にも、このように民間人も数多く亡くなっていることを忘れてはいけません。この事件は、民間人も戦争になれば否応なく巻き込まれていくことを我々に教えてくれています。

※土着の非正規武装集団



豊村満州開拓団(四道河)の位置



参考文献：『四道河にねむる 拓友に捧ぐ』図書館等にあるので、より詳しく知りたい方はお読みください。

開催中！

ふるさと文化伝承テーマ展
戦争とにしがおりの人々

七月一日（金）～
九月二十九日（水）木曜休館

ふるさと文化伝承館
〒〇五五―一八二―七四〇八



昭和三十三年（一九五七）には、この事件の慰霊碑が吉田の諏訪神社境内に建立され、その悲劇を今に伝えていきます。そして現在も、事件のあった八月十七日には、毎年ここで慰霊祭が行われています。

アジア太平洋戦争では、戦場で亡くなった方以外にも、このように民間人も数多く亡くなっていることを忘れてはいけません。この事件は、民間人も戦争になれば否応なく巻き込まれていくことを我々に教えてくれています。